

ある不登校の少女の精神分析的遊戯療法過程

高 橋 千香子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

The Process of Psychoanalytic Play Therapy with a Girl who Refuses School

Chikako Takahashi

Naragakuen University Narabunka Women's College

ある不登校の少女の精神分析的遊戯療法過程について報告する。クライアントのA子は、両親が離婚してしまうのではないかと恐れ、家族の雰囲気をよくしようと明るく振舞ったり、長女として積極的にきょうだいの面倒を見るなど、過剰に気遣いながら生活していた。そして本来の自分を見失い、心身ともに疲弊し不登校に至り、筆者との遊戯療法を開始した。遊戯療法の中で、A子の両親の離婚に対する強い不安の背後には、幼児期から母親に甘えられないと感じていたこと、つまり母親への未解決の両価的葛藤を抱えていたことが明らかになった。A子自身が否認していたそれらの感情に気づき、本来の自分を取り戻し、登校を再開していった経過について振り返り、考察した。

キーワード：不登校、両親の離婚への不安、気遣い、両価的葛藤、遊戯療法

1. はじめに

子どもの不登校の要因にはさまざまなものがあるが、家族の問題が心理的要因のひとつと考えられるケースは多い。例えば両親が不仲である場合、子どもは両親がいつか離婚してしまうのではないかと不安を抱くものである。そして両親が離婚してしまわないよう、家族の雰囲気を良くしようと子どもなりに明るく振舞ったり、親に心配をかけまいと過剰に聞き分けのよい良い子になるなどして、家族を崩壊から守ろうとする。しかし、やがて子ども自身も気づかないまま本来生きるべき自分を置き去りにしてしまい、心身ともに疲弊していく。そして、ある時から朝になると頭痛や腹痛が生じ、登校したくてもできなくなってしまう。子どもは学校に行けない自分は周囲に迷惑をかけていると罪悪感を抱き、何とか登校しようとがんばるが、ますます消耗して悪循環に陥ってしまう。

本事例のA子は、まさにそのような状態に陥り、当時筆者の勤めていた相談室を訪れた。精神分析的遊戯療法を行っていく中で、両親の離婚に対する強い不安の背後に、幼児期からの母親との情緒的葛藤が隠されていたことが明らかになった。その経過を振り返り、A子の不登校発症の経緯、そして筆者と

の遊戯療法においてどのようにA子の心の内実が表現され、本来の自分を取り戻していったのかについて検討を加えたい。なお、プライバシーの保護については、クライアント本人が特定されることのないよう、事実関係を一部改変するなどして十分な配慮を行っている。

2. 事例の概要

相談開始時、A子は小学校2年生の少女であった。3人きょうだいの長女で、妹が2人いる。小学校1年生の後半から登校できなくなり、同じ時期に保育所を休みがちになった上の妹と2人で家になるようになり、困り果てた母親から相談が申し込まれた。

家族は、両親と子どもの5人家族である。父親は会社員で、A子によると無口で、毎晩帰宅は遅く、「何を考えているか分からなくて怖い」。母親も会社員で、A子は生後11ヵ月から保育所にあずけられた。

母親は仕事熱心で、A子の保育所の迎えの時間に間に合わないことが多かったが、仲の良い母親と協力し、交代で迎えに行くなどして乗り越えたとのことであった。受理面接で母親は、A子の保育所時代について「あの頃は大変だったが、良い時代だった」となつかしく振り返った。このエピソードは同時に、父親はA子が幼い頃から育児に協力的でなかったことを示していた。母親は、「夫は子どもが増えるにつれて育児に協力しなくなった。最近では口論になることが多く、私は離婚という言葉も出しています」と話した。母親は、今回のことで会社に相談し、正社員からパート勤務に変えてもらったという。帰宅時間を早くすることで、子どもたちが安心して登校できるのではないかと考えたとのことであった。

A子の初回面接には、母親と上の妹の3人で訪れた。母親は、どちらかという表情は硬く、抑うつ的であるのに対して、A子は不安は覗かせているものの明るく振る舞っていて、母親とは対照的な印象を受けた。A子と筆者が2人でプレイルームに入ろうとすると、妹が大泣きしてA子から離れようとせず、A子が必死でなだめる様子がみられた。筆者と2人になったA子は、不安と緊張感を漂わせながら、「ここへは私が来たいと思ったから来たの」「私が学校に行けないのは、お父さんとお母さんの仲が悪くて不安だから」と、両親が離婚してしまうかもしれない不安な気持ちや、登校できていない自分自身の状況について、言葉多く語った。まるで大人のように語るA子に、筆者は健気さと痛々しさを感じた。そして、A子の週1回50分の遊戯療法および母親（両親）の月1回の面接を設定した。

3. 遊戯療法過程

A子の遊戯療法は、約2年間、計75回実施した。その過程を以下に記す。A子の発言は「 」、セラピストである筆者の発言は〈 〉で示す。

初回、A子は「学校にね、行こうと思っていたけど、行けなくって…」と、筆者に対してひどく申し訳なさそうに話した。そこで筆者は、母親の了解を得ていることを伝えた上で、〈学校にはしばらく行かなくてもいいんじゃないかな?〉と提案すると、安心した表情を見せた。

A子は描画をはじめるが、「人の顔は描けない」と言いながら、楽しそうに明るい色調の花や小動物を描いていった。次に対戦ゲームを選ぶが、筆者との直接的な対決は避け、「先生も勝ちますように!」と気遣いを見せた。4回目、A子は「嫌いだけど、へびを描く。この床のすきまからへびがはいってきたらどうしよう…」と不安そうにつぶやきながら、画用紙の端に小さなへびを1匹、描いた(絵1)。筆者は、へびはA子の心の土台の不安定感、または恐怖感を表している



絵 1

と考えたが、それ以上の表現の進展はなく、筆者からも言及しなかった。筆者はA子からたびたび気を遣われることに居心地の悪さを感じていた。表面的な良い関係が続くことに気詰まりを感じながら、A子の内にあるであろう不安や怒り、恐怖といった否定的な心情にどのように触れていけるか模索していた。

19回目、透明の虹の箱型のアーチに交互にピースを入れていき、虹のアーチを崩したら負けというルール「レインボーアーチ」(写真1)というゲームをしていた時、A子の腕が当たってしまい、虹のアーチが大きな音を立てて崩れた。A子が必死になって謝るので、筆者が「Aちゃんの腕が当たってしまっただけなのにね。先生が怒るんじゃないかって思ったの?」と、A子が感じたであろう不安に触れると、うなずいた。22回目もレインボーアーチをしたが、虹のアーチが崩

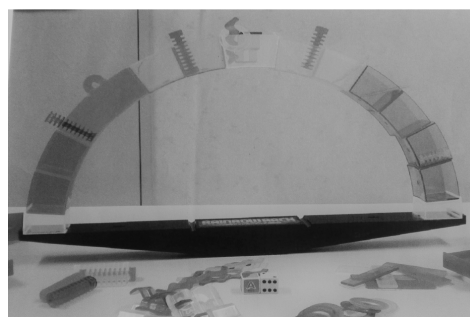


写真 1

れ落ちた直後、A子は腹痛を訴えてトイレに行くという反応を示した。トイレから戻ったA子に、「このアーチはとてもきれいだけど不安定だから、いつ崩れるかと思うと怖くなっちゃった?」と伝えた。するとA子は、言葉で返す代わりに、粘土でウサギを作り始めた。少しぼっちゃりとした人のような体型で、顔に目と眉をつけると「何、この顔、怒ってるやんか!」と言った。次に眉をはぎ取ると大きな赤い口をつけ、「変なウサギの出来上がりー!」と言いながら、A子が好きだというイチゴミルクキャンデーを持たせた。終了時間になり、A子を迎えに着た母親は、そのウサギを見て「A子そっくり」と言い、A子は「このウサギは、お母さんや」と言い返した。

続く23回目では、「お母さん、まだ来ないよね?」と確認した後、ホワイトボードに1本の紫色の花を描いた。(筆者にはそれは母親のイメージと重なった)そして、「絵って面白い」とつぶやきながら「人間のさまざまな表情」を次々と描き、最後に「お母さんの顔」を描くと、その上に「あはははは ほほ」と書いて文字だけ消して、消した跡を「影みたい…お化けみたい。お父さんの髪型に見える」と言った。母親への否定的な感情を含むさまざまな心情が少しずつ表現されてきた。

27回目では、大ウサギ、小ウサギ、赤ちゃんの3つのぬいぐるみを使って人形劇を始めた。「昔々、あるところに悪い大ウサギと小ウサギがいました。2匹はとても仲が悪くて、赤ちゃんを食べてしまいました。たかっただけです。(赤ちゃんが大ウサギを突き落とし)、大ウサギは大きな釜の中に落ちて死んでしまいました。小ウサギはとてもかわいらしくて賢かったのですが、様子を見に行き行って一緒に落ちてしまいました。(赤ちゃんが小ウサギを助け、) 2人は本当は友達になりたかったのです!そして大ウサギは釜の

中で骨だらけになってしまいました。赤ちゃんは、本当は大ウサギの骨を食べてしまっていたのです…!」。筆者は、突然始まった攻撃性と破壊性にまつわる激しい物語に圧倒されながら、聞き入ることしかできなかった。この後、A子は少しずつ登校を始めた。

29回目には、夕日と夕焼け空、夕日に染まった赤い海を描き（絵2）、「先生にプレゼント。先生もA子に何か描いて」と求めてきた。筆者は何を描いて返すか迷いながら、A子の思いを受け止めつつ静める対応として、月と夜の海を描いた。31回目では「これは先生」と言いながら赤い絵の具で女の子の顔を描くが（絵3）、やがてそれは自分だと言い、顔の周りを全部赤色で塗りつぶしながら、「私、今まで変になったものは全部捨ててきた」と何度となくつぶやいた。次の32回目は、A子のマフラーで目隠し鬼ごっこをした。鬼役で迫る筆者に対して、「怖い～！ミイラかゾンビみたい」と叫びながら、うれしそうに逃げ回った。筆者とのあいだで攻撃性や恐怖感を遊べるようになってきたと感じられた。47回目では「私のことを全部書いた」という「9歳の自分」というタイトルのついた手紙を筆者にくれる。そこには筆者のことを「大好き」と書いてあり、文章の最後に2人が並んで立っているイラストが描かれていた。筆者と思われる女性のイラストは、A子の母親にも見えた。この頃には、レインボーアーチやアンバランスゲームなどを、以前よりも緊張せず、楽しめるようになっていた。



絵 2



絵 3

A子は安定して登校していたが、4年生に進級し、下の妹が小学校に入学すると、妹が登校できない日が増えていった。A子は「妹のため」と再び学校を休むようになり、母親もとうとう会社を辞める決断をした。

48回目、母親が妹の病院に付き添うため、A子はセラピー終了後、少しの時間ロビーで母親を待つ約束をしていた。ところが母親は1時間以上現れず、A子は電気の消えた暗いロビーで待たされることになった。勤務を終えた筆者が、ロビーで激しく泣きじゃくるA子を見つけ、驚いて対応した。A子は筆者が目に入らないほど動揺し、不安と恐怖に圧倒されていた。

次の週、A子は「息が苦しい」とキャンセルした。以降、A子は相談室でもイライラした様子を見せるようになり、「お母さん、来てくれなかったらどうしよう」と、母親に置き去りにされる不安をくり返し訴えるようになる。55回目には、A子は「ここを、いつかやめたいと思って」と打ち明けた。相談室に来るために母親の手伝いをするようきつく言われたり、「1人で行きなさい」と言われるとのことだった。母親が仕事を辞めても、姉妹は不登校のままであり、母親自身の焦りや心理的負担感が増していることが推察された。この後母親は、学校からのすすめで学生ボランティアの訪問支援を利用することを決める。つづく56回目、A子は「明日から学生さんが家に来ることになったの。ここに来ると、ことばがことばに置き換わる。ニッコリだけど、明日、大学生の人が来たらどうしようと迷う」と困惑した様子で話した。筆者が「自分が何とかしなくちゃと思うのね。A子ちゃんは、何でも1人で背負っちゃ

うんだよね。どうしてこんなことになったんだろう…?」と伝え、A子は「そう…一番寂しかったのは1年生の時…」と、はからずも学校に行けなくなったきっかけについて話し始めた。「学校から帰って、家に誰もいなくて一人ぼっちでいた時、すごく怖くて。…で、おばけが見えて」と、その状況を思い出しながら涙を浮かべて語り、最後に「このことはお母さんには言っていない」と付け加えた。

57回目には、「私はお母さんに甘えているし、やっぱりお母さんなしでは生きていけないって思う」「上の妹が生まれるまでが一番つらかった。お母さんのお腹が大きくなってきて、すぐに生まれると思ったのに、生まれるまでが長かったの。妹がお腹にいるときから、お母さんに甘えたくても甘えられなかった」と、幼児の頃から母親に甘えられなかったことを想起しつつ、語った。60回目には粘土でさつまいもを作り、中を割って確かめる遊びをしながら、幼い頃、母親がA子のアトピーのために食事のコントロールをしてくれていて、甘いおやつはさつまいもだったと、母親との肯定的な経験もなつかしそうに語った。抑圧していた母親との情緒的葛藤を言語化できるようになるにつれて、過剰な気遣いをみせることは減り、母親に対しても対等に意見や不満を主張するようになっていった。ほどなく妹と2人で別機関の適応指導教室に通うことになったA子は、75回目、相談室をやめて新たな場所でがんばっていきたくと筆者に告げた。この日以降A子は来室しなくなり、遊戯療法は終了として、その後母親面接を数回行い、当相談室における関わりは一旦終結とした。母親からの連絡で、5年生になると同時にA子は学校に再復帰し、毎日登校しているとのことであった。

4. 考察

4.1 A子の生育歴と発症の経緯について

A子は、「無口で何を考えているか分からない」父親と、仕事熱心な母親のあいだに長女として生まれた。A子の両親は、母親が「子どもができるたびに夫は育児に非協力的になった」「最近では口論になることが多い」と話していることから、A子が幼少の頃から夫婦関係は険悪な状況が続いていることが推察される。A子は物心つく頃から、両親が離婚してしまうのではないかと不安にさらされていた。また母親は、夫への不満や怒りを仕事に没頭することで紛らわせていた可能性があり、A子は長女として母親の一番近くにいて、母親の心情を敏感に察知していたと思われる。A子は57回目に、妹の妊娠中から母親に甘えたくても甘えられなかったと述べている。それはA子が2～3歳頃のことであり、マラー（1975）¹⁾のいう分離個体化の時期にあたる。この時期の子どもは、母親に両価的感情を抱き、依存と拒否をくり返ししながら、自分を受け入れてくれる存在として母親を認識し、心理的に分離するとともに、自分自身も結合された人格としての自己を形成していく。しかしA子は、母親に両価感情を向けると見捨てられるかもしれないという恐怖感から、無意識に聞き分けの良い子としてふるまうことで、母親との良い関係を守ろうとしたことが推察される。妹が生まれてからも、仕事や育児に疲れている母親に代わって積極的に妹たちの面倒を見たり、明るく振舞って気を配るなどして、家族を守ろうとしてきた。こうしてA子は、世話役の自己を大きく発達させ、本来生きるべき自己の部分を放置せざるを得なかったと考えられる。一見しっかりと、面倒見の良い子どもに見えるが、実は心の土台は不安定

で、危うさを抱えたアンバランスな状態であった。そのような中で、小学校1年生での早すぎる留守番をきっかけに、心のバランスが破綻し、不登校に至ったと考えられる。

4.2 遊戯療法過程の検討

A子は当初、プレイルームでも筆者を過剰に気遣う様子を見せた。描画もきれいで可愛らしいものが多く、筆者は違和感と気詰まりを抱いた。A子は「人の顔は描けない」と言ったが、本来の自分が分からなくなっていたA子は、自身の感情が投影されるであろう「顔の絵」は、とても描けない状態にあったと考えられる。

そのような中で、19回目に選んだレインボーアーチは、A子の心的状況を表すのにふさわしいゲームであった。A子が、このゲームを手にした時、極端と思えるほど怯え、怖がっていたことを覚えている。透明できれいな造形物が一瞬にして崩れ落ちる様は、まさに自分自身の状況を表わすようであり、A子には衝撃的だったのではないだろうか。崩れ落ちる恐怖感を筆者に受け止められたA子は、怒った表情のウサギを作ることで自身の感情に気づくとともに、「変なウサギ(自分)」にも気づくことになった(21回目)。そのウサギを見て、「A子そっくり」と言った母親に対し、「それはお母さんや」と言い返したA子の反応も興味深い。次の回でA子は、それまで描けないと言っていた「人間の顔(表情)」を次々と描き、さらに母親を揶揄する表現をした。ここで初めて、A子と母親の心理的に未分化な関係性と、A子の中で抑圧されている母親への情緒的葛藤の存在が垣間見え始めたといえる。この時A子は、自ら描いた絵にお化けのような母親を見、その背後に部分対象としての父親を見ている。A子の中にある、死の恐怖を表わすような対象であり、両親という関係への得体のしれない恐怖、すなわちメラニー・クラインのいう「結合両親像(combined parents)」²⁾を表わしているとも考えられる。いずれにしても、A子の内面には、意識されていない対象への攻撃性や死に対する恐怖感といった、原始的で未分化な情緒がうごめいており、それらが遊びの中で表現される展開となっていた。

こうして自己の内面に向かい始めたA子は、次に人形劇をした。この劇についてもさまざまな解釈ができと思われる。つまり、大ウサギは父親対象、小ウサギは母親対象、赤ちゃんはA子を表象していると捉えられるし、別の見方では、大ウサギは母親、小ウサギはA子の世話役の自己、赤ちゃんはA子の本当の自己を表象していると捉えられるであろう。いずれにしても、A子自身は「赤ちゃん」であり、「赤ちゃん」は悪い大ウサギを倒して、死したその骨を食べたかったという。A子の内部に秘められていた、口唇期レベルの激しい情動、すなわち対象の破壊と一体化への欲求が表現されたと考えられる。そこにいた筆者も圧倒されると同時に、対象との一体化を求めるA子の切実さが伝わってきた。この人形劇を表現した後、A子は赤色を中心とした絵や自己像を描いたが、それらの赤色のインパクトは強く、放置していた本来の自己の部分に、ようやく温かい血が流れ始めたというように筆者には感じられた。その流れでA子は「9歳の自分」について綴ったが、それは新たな自己の誕生でもあり、今まで切り捨ててきた、見ないようにしてきた自己の部分統合し、まとまりをもった本来の自己感覚を取り戻し始めたと考えられた。

しかしその直後、セラピーの終了後に母親に現実的に放置されるという出来事が起こる。つまり、母親から心理的に分離し、自己を構築し始めたその時に、リアルに母親から見捨てられる恐怖にさらされ

たことになる。A子の怯える様子は筆者の理解を超えるものであり、A子の中の未解決の葛藤あるいは何らかの外傷体験の再演の可能性を考えた。母親はこの時期、不安定な妹の方を心配しており、A子にはむしろ、そろそろ自立してほしいと考え始めていた可能性もある。妹も、A子にとっては守るべき存在であると同時に、母親の関心や愛情を奪う憎らしい存在であった。

この後、A子は、母親との分離を象徴する、相談室に通うことそのものに対して強い不安を抱くことになる。しかし筆者は、ここにA子の中心的なテーマ、つまり母親との情緒的葛藤が表れていると理解した。以降の回で、筆者はA子に対して、母親への気持ちをできるだけ言語化するように励ます関わりをしていった。ほどなくA子は、「母親には話していない」こととして、不登校のきっかけとなった留守番での恐怖体験（外傷的体験）について涙ながらに語った。また、妹の妊娠期から母親に甘えられなかったことを想起して言語化し、筆者と共有した。ここに、A子の幼児期からの母子関係にまつわる未解決の両価的感情と不登校に至った経緯がつながり、明らかになったといえるだろう。この頃にはA子の過剰な気遣いはなくなり、思春期を控えた一人の女の子として、地に足をつけて家族や友人と関わるできるようになったと筆者には感じられていた。しかし、妹に対する心理的ケアは未実施なままであり、妹が未だにA子と離れられない中、妹のためにA子が一緒に別機関の相談室に通うことになった流れは了解せざるを得なかった。A子が自らセラピーの終わりを宣言した時、筆者には若干の心残り、A子から見捨てられた感覚が生じたが、A子が筆者に気遣うことなく、自らの意志で相談室からの自立を果たしたのだと理解し、受け止めた。

4.3 緊張持続性外傷について

A子の不登校の背景には、両親の離婚への不安だけでなく、母親との早期の未解決な両価的葛藤があり、それを抑圧し防衛するために世話役の自己を発達させていたことが明らかになった。

A子の家族は、両親ともに正社員として働いており、経済的には安定していたが、心理的にはいつか家族が崩壊してしまうかもしれないという不安定な状況が長らく続いていた。少なくとも子どものA子には、そのように感じられていた。A子は離婚の不安を母親に伝えており、母親も理解していたが、その母親に甘えられないという葛藤も、A子にとって大きな心理的課題となっていた。母親は、自分に対するA子の感情をどこかで感じながらも、仕事や夫のことで精一杯で、妹たちの世話を引き受けてくれるA子を無意識に頼っており、結果としてA子自身と向き合うことができなくなっていたことが推察された。

近年、親子関係が心理的に逆転している現象が話題になることが多い。つまり、子どもが親を心理的にケアしているという関係である。親の事情は、仕事の多忙さ、ストレス、何らかの病気、夫婦関係などさまざまあると思われるが、親自身も家庭を守るため、必死で働き、ゆとりのない中で子育てをしている。そんな中で、心配や苦勞をかけない子どもは、親にとっても有難い存在であり、周囲からも親思いで気遣いのできる良い子という評価を受けて成長していく。しかし、A子のように早期の情緒的葛藤から本来の自己を十分に生きられていない場合等に、やがて学校に行けなくなったり、抑うつ感や無力感、焦燥感や苛立ち、不眠、過呼吸、嘔吐などの身体化症状として表れることがある。このように、子どもにとって母子関係、父子関係、そして両親や家族の関係にといった具合に、幾重にも葛藤的あるいは外傷的な状況が重なり、それが長期に渡って持続するような状態を、齋藤は「緊張持続性外傷」と呼

んだ³⁾。つまり、ウィニコットのいう抱える環境 (holding environment) ⁴⁾ が長期にわたり機能不全を起こしている状況は、子どもにとって外傷的体験に等しいということが示唆されている。A子の場合は小学校時代に発症し、ケアを受ける機会があったが、成人前後や、それ以降になるまで持ち越される場合もあるだろう。筆者の勤める短期大学にも、同じような心理的課題を抱えた学生は見受けられる。精神的な不調を感じ、自ら心理カウンセリングを求めてくる学生は、親子関係や家族の問題を打ち明ける場合が多い。しかし、自らの心理的課題は否認したまま、単なる身体的な不調として乗り切ろうとする学生も近年増えている印象である。

いずれにしても、周囲に対してほとんど迷惑をかけない、聞き分けの良い子どもの状態に気づいた場合は、身近な大人が注意深く見守る必要がある。

5. まとめと謝辞

A子のような明るく聞き分けの良い女の子が、ある時突然学校に行けなくなるという事態は、周囲にとって衝撃的であると同時に、誰よりもA子本人が、なぜ体が動かないのか、学校に行きたいのに行けないのか分からず、困惑したであろう。A子の気遣いや「良い子でいる」という防衛は、母親との安定した関係を維持するために幼児期から無意識に身につけてきたものであり、ほとんどA子の性格のようになっていた。そのため、遊戯療法においても、その奥にある否定的感情に触れるまで時間を要したし、終了後も家族関係が劇的に変化したわけではない。しかし、遊戯療法を通して自分の内面に向き合うことができたA子は、訳の分からない心の否定的部分を統合し、不自由さから抜け出し、自由になった印象であった。このような経験ができたことは、A子の人生において必要な時間だったのではないかと考える。

初回の出会いでA子は、「私がここに来たいと思ったから来た」と言ったが、そこには自分自身を何とかしたいというA子の強い意志を感じた。A子の遊戯療法を担当して、筆者は多くのことを学んだ。ここにA子とご家族にお礼を申し上げるとともに、今もA子が自分自身をいきいきと生きていることを切に願っている。また、A子の遊戯療法を実施するにあたり、長期に渡りご指導頂いた川上範夫先生に心よりお礼申し上げたい。

追記

本論文は、「奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要」投稿規定ならびに筆者の所属する日本精神分析学会発行の「精神分析研究」の投稿規定に従い倫理的配慮を行ったものである。

引用文献

- 1) Mahler, M. S. (1975) The Psychological Birth of The Human Infant. Basic Books, New York. (高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳：乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化。351pp. 黎明書房, 1981.)

- 2) Klein, M. (1932) The Psycho-Analysis of Children. Hogarth Press, London. (衣笠隆幸訳: 児童の精神分析. メラニー・クライン著作集2. 368pp. 誠信書房, 1996.)
- 3) 斎藤久美子 (2004) 日本精神分析学会第50回記念大会におけるコメント。
- 4) Winnicott, D. W. (1965) The Maturation Process and the Facilitating Environment: Studies in the Theory of Emotional Development. Hogarth Press, London. (牛島定信訳: 情緒発達の精神分析理論. 340pp. 岩崎学術出版社, 1997.)

参考文献

- 1) 木部則雄 (2006) こどもの精神分析 クライン派・対象関係論からのアプローチ. 245pp. 岩崎学術出版社
- 2) 村田豊久 (2009) 子ども臨床へのまなざし. 297pp. 日本評論社.
- 3) 川上範夫 (2012) ウィニコットがひらく豊かな心理臨床―「ほどよい関係性」に基づく対象関係論. 312pp. 明石書店.
- 4) 平井正三 (2015) 子どもの精神分析的な心理療法の経験―タビストック・クリニックの訓練―. 235pp. 金剛出版.
- 5) 滝川一廣 (2017) 子どものための精神医学. 463pp. 医学書院.

